

(1) 教える・学ぶ関係の偶然性

図1：主体Bが学ぶ契機は、主体Aの「教える」行為によってのみ生じるのではない

図2：主体Aがどんな行為をしても、主体Bには「学ばない」という選択肢が存在する

教える—学ばない関係のみ、主体Aの責任が問われる

また、

①学校で学ばないとしても、人生のその他の局面で学ぶことがありうる

②ただし、「教える—学ぶ」という関係をとらない場合、学ばない可能性も大きい

図3：「教える—学ぶふりをする」という関係の可能性

「学ぶふりをさせる」ためのイデオロギーや権力という問題

(2) 教える・学ぶ関係の変容

1970年代の大きな変化→学ぶ側の優位な時代

サービス提供装置としての学校

学ぶ側の優位化→二つの方向で教育関係の再構築

①学ぶ側を軸にした教育関係論への組み替え

but, 「学ばない」可能性という問題

②「教える」の拡散

主体Bの内面へ／システムの周辺部で生起するさまざまな問題の予防や対処へ

but, 介入のジレンマや無限責任へ

(3) 複数の選択肢の可能性

教える・学ぶ関係をどう組み直すか、あるいは、組み直しの言説を作るか

・学ぶ側がもっと「教える—学ぶ」関係にコミットするような仕掛けを作る

「楽しい学校」／必要不可欠なものへのスリム化

・「教える」をやめてしまう

・「教える」を復権させる

どういう選択肢が妥当とされることになるかは、

①大人と子供の差異をどう再定義するか

②未来の社会としてどういう社会が望ましいと考えるか

という点の選択による

主体A	主体B
教える	— 学ぶ
労働する	— 学ぶ
遊ぶ	— 学ぶ
いじめる	— 学ぶ
死ぬ	— 学ぶ

図1

主体A	主体B
教える	— 学ばない
労働する	— 学ばない
遊ぶ	— 学ばない
いじめる	— 学ばない
死ぬ	— 学ばない

図2

主体A	主体B
教える	— 学ぶふりをする

図3

図4 殺人（人口比）の推移（各年齢層人口10万人あたり）

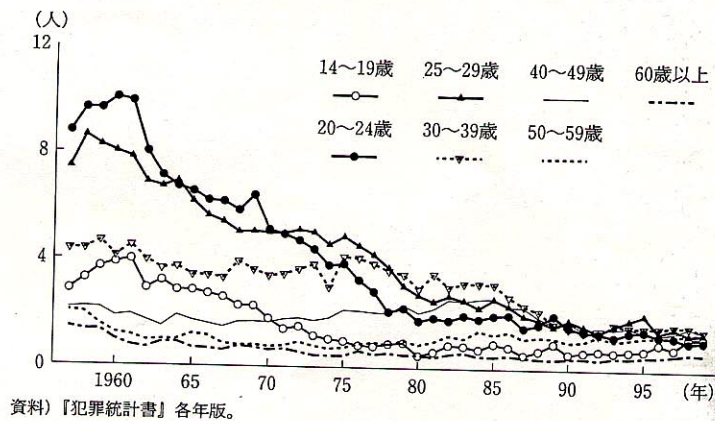


図5 年齢層別窃盗検挙者数の推移

